The Gakushuin Supporter's Club

学習院サポーターズ倶楽部 会員Letter

vol.11 September 2019

学習院の 名情景

第5回 南1号館

キャンパスに遺る数々の馴染み深い場所をご紹介していくこのシリーズ。第5回は今春、化学遺産に認定されたドラフトチャンバーを有する「南1号館」。2013（平成25）年より一般教室として利用されています。

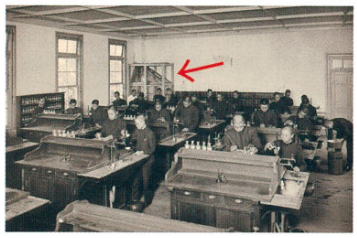
南1号館外観。左手2階部分に出窓式ドラフトチャンバーが見える。2009（平成21）年、国登録有形文化財に登録された（『学習院 南1号館 再生した旧理科教場』より）

緑豊かな学習院の目白キャンパスの奥まった場所に、これぞ大学校舎という威風堂々とした建物が構えています。ネオ・ゴシック様式のこの建物は南1号館です。旧制学習院時代の1927（昭和2）年、理科特別教場として竣工しました。当時、一流の建築集団が在籍していた宮内省内匠寮が設計を担当。関東大震災でも倒壊しなかった帝国ホテルの構造をモデルに耐久性を考慮した鉄筋造で、また、スクラッチタイルを張ることで、デザイン性も重視しています。

中世の城を思わせる玄関や窓のアーチ意匠、アール・デコ調の装飾が施された表階段の手すりなど、見ごたえあるディテールはいくつもありますが、ひと際注目されるのが出窓式のドラフトチャンバーです。ドラフトチャンバーとは、化学の実験などで発生する有毒なガスを排気する設備のこと。学習院大学理学部化学科教授を務めた故・村松康行氏が調査したところによると、学習院のドラフトチャンバーより古いものが旧制第四高等学校（金沢大学の前身）や旧制第五高等学校（熊本大学の前身）でも使用されていました。しかし、どちらも教室内に組み込まれており、出窓式で独立した排気装置を備えた学習院のドラフトチャンバーは画期的な設計だったと言えます。また、上記2校に設置されていたドラフトチャンバーは教室に1台だったのに対し、学習院には1室に2台、計6台もあり、学生は恵まれた環境でいきいきと学んでいたことでしょう。当時の理科特別教場の設計図面が宮内公文書館に保管されています。それを見ると科目ごとに多くの実験室や機器室、標本室があり、レベルの高い講義が行われていたことが推察されます。

出窓式ドラフトチャンバー外観

戦後は理学部の教室、研究室として使われてきた南1号館は2013（平成25）年春、2年の改修工事を経て一般教室として利用できるようになりました。国登録有形文化財の建物に新たな命を吹き込み、現役として活用していくことは、建築資源の保護にもなります。折しも今春、ドラフトチャンバーはその歴史的価値が認められ、第10回化学遺産に認定されました。悠久の物語を紡んできた南1号館は、これを機に未来への時を刻み続けます。



大正時代の化学実験風景。箱型タイプのドラフトチャンバーが据え付けられていた（『大礼奉献学習院写真』より）

取材協力・画像提供:学習院大学史料館 学芸員 冨田ゆり

サポーターズ会員No.00736　薬袋 知子（学習院大学文学部心理学科 卒業2004年）

サポーターズ倶楽部があるから沖縄の地にいても学習院に感謝の気持ちを伝えられる。

人生の"道標"をくれた学習院での学び

長きにわたり学習院で学びました。厳しくも愛のある教育をしていただいた女子中・高等科時代。友達同士で「菜園を作りたい」と先生にお願いし、野菜を育てて理科室で食べたり、冬には先生と一緒に餅つきをしたりしたことが印象深い思い出です。当時、女子部にカウンセリングルーム（C.A.T.ルーム）ができました。学生生活を送る上での悩み事をカウンセラーが相談にのってくれる場所です。このような仕事があるのだと興味が湧き、何度か訪れるうちに大学で心理学を学びたいという動機にもつながりました。

どちらかと言えば表立った行動を控えていた女子中・高等科時代を反省し、大学では学生相談所、社会福祉研究会、卒業生委員会など課外活動には積極的に参加するように。社会福祉研究会の活動の一環で自閉症の子どもたちのお世話をした経験から、今の職業を選びました。また、学生相談所や卒業生委員会における、企画、資料作成、折衝、実行後のふり返りという活動の経験は、社会で役立つものばかりでした。就職後数年で沖縄へ転勤となり、OB会の手伝いもままならない状況にあって、育てていただいた学習院への感謝の気持ちを表したいと思ったとき、学習院からのお便りで「寄付」という形があると気付きました。母校とは遠く離れた地にいても、サポーターズ倶楽部を通して「学習院ありがとう」の気持ちを継続できるのは、とても励みになります。

卒業生委員会では委員長として、卒業アルバムの制作や卒業記念祝賀会の運営に携わりました。

私たちの取り組みを理解してもらうために

現在は発達障害や自閉症の子どもたちの治療・教育機関に勤務しています。子どもたちの社会適応力を育てるには、身体と頭を常に使って脳の発達を向上させなければなりません。そのため歩行トレーニングや概念学習などを取り入れていますが、療育に関しては様々な意見があるため一般化するのが難しいところです。子どもの成長に悩んでいる親御さんや支援者の方、そして広く世間にも私たちの取り組みを理解してもらえるよう、今は努力する日々です。体力的にも精神的にも厳しい現場で仕事を続けていられるのは、学習院で培ったスキルと使命感、学習院時代の友人の存在のおかげです。

Profile　薬袋 知子（みない ともこ）

東京都出身。女子中等科より学習院に学び、高等科時代の気づきを経て学習院大学文学部心理学科へ。卒業後は自閉症・発達障害児の治療・教育機関に勤務。2006年に沖縄へ転勤、現在は「コロロメソッド発達療育支援センター（琉球教室）」センター長。